高知女子大学看護学会誌　VOL.44, NO.1, pp166～173　2018

研究報告

外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがい

Purpose in life of elderly cancer patients undergoing chemotherapy at outpatient's setting

下出　真規子 (Makiko Shimode)*1　浦和　あざみ (Azami Urawa)*2
大石　牧奈 (Makina Oishi)*3　小松　礼奈 (Rena Komatsu)*4
宮下　朋子 (Tomoko Miyashita)*5　森本　悦子 (Etsuko Morimoto)*6

要　約

本研究の目的は、外来化学療法を受ける高齢がん患者の治療継続の支えとなっている生きがいにはどのようなものがあるかを明らかにし、治療継続を支える看護援助の示唆を得ることである。外来化学療法を受ける高齢がん患者５名を対象に半構成的面接を行い、データを質的帰納的に分析した。その結果、15のカテゴリー、38のサブカテゴリーが抽出され、さらに『これからも治療を続けて生きていたいという強い意思』『大切な家族の存在』『治療意欲を高める生きる目標』『自分のことを理解してくれる人々との関わり』『前向きな気持ちを支える過去の経験』の５つに分類された。これらから対象者の大切にしてきた思いや考え、身近にあるものが生きがいとして示された。看護者は高齢がん患者が生きていたいという強い意思を持ち続けられるよう治療に取り組む姿をねぎらい、高齢がん患者自身が体調を整えることを支援することが求められると考えた。また、高齢がん患者が持つ生きがいを認識することができるように働きかけることが必要であると考えた。

キーワード：外来化学療法　高齢がん患者　生きがい

Ⅰ．はじめに

国民衛生の動向より、我が国における主要死因の首位は悪性新生物であり、年齢階級別においても40～80歳代で悪性新生物が死亡順位の首位である。さらに患者の高齢化は進み、2014年の厚生労働省の患者調査では、65歳以上の高齢患者は全体外来患者数の約半数となっている。また、入院で治療を受けるがん患者数は2005年から減少し、外来で受療している患者数は2002年から増加傾向となっている。その背景の１つとして、近年在宅でも管理が可能な薬剤の普及と支持療法の進歩がある。庄司ら（2015）は、外来治療を希望する患者が多いことを報告しており、今後も外来で治療を受けるがん患者数は増加することが予想される。先行研究より、外来で化学療法を受ける高齢がん患者の体験には身体・心理・社会的に様々な困難があり、患者は家族の存在や個々の役割などを支えとしてその困難に対処していることが明らかになっている。その支えは患者の治療継続を大きく後押ししており、生きがいという言葉で表すことができると考えた。しかし、病棟で治療を受ける終末期がん患者や外来化学療法を受けるがん患者の家族を対象とした生きがいの研究はなされている（千田ら，2013）が、外来化学療法を受ける患者本人に焦点をあてたものは少ない。今後の外来化学療法を受ける高齢がん患者数の増加をふまえ、外来通院で化学療法を継続していく上では患者が自らを支える生きがいを持つことが重要であると考え本研究を実施した。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は、外来化学療法を受ける高齢がん患者の治療継続の支えとなっている生きがいにはどのようなものがあるかを明らかにし、治療継続を支える看護援助の示唆を得ることとした。

*1高知大学医学部附属病院　*2昭和大学病院　*3川崎医科大学附属病院
*4埼玉県羽生市役所健康づくり推進課保健係　*5兵庫県立尼崎総合医療センター　*6高知県立大学看護学部

Ⅲ．用 語 の 定 義

・高齢がん患者：70歳以上のがん患者
・外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがい：加齢による老化や死への不安、化学療法による不調を抱えながらも治療を継続している高齢がん患者の気持ちの支えとなるもの

Ⅳ．研　究　方　法

１．研究デザイン

質的帰納的研究デザイン

２．対象者

本研究の対象は、外来で化学療法を受けている70歳以上のがん患者で、放射線療法を同時に受けているか否かは限定せず、コミュニケーションに支障がないものとした。

３．データ収集方法

１）半構成的インタビューガイドの作成

既存の外来化学療法を受けるがん患者や高齢がん患者に関する研究論文の検討の結果抽出された内容を基に、インタビューガイドを作成した。次に、各研究者が統一したインタビューを実施できるようにインタビューガイドに基づいたプレテストを複数回実施し、インタビューガイドの精錬化および研究者のインタビュー方法の習得に努めた。

２)インタビューの実施

プレテスト後に修正したインタビューガイドを用いて、研究者２名１組で対象者１名のインタビュー調査を１回30分程度行い、内容は対象者に同意を得たうえでICレコーダーに録音した。データ収集期間は平成29年８月～９月であった。

４．データ分析方法

インタビューで得られた録音データから対象毎に逐語録を作成した。各対象者の逐語録を熟読し生きがいを表している文脈を抽出し、意味内容を損なわないよう名称をつけてコード化した。次に全対象者から得られたコードを類似する意味から集め名称をつけサブカテゴリーを、さらに抽象度を上げてカテゴリーを作成し名称をつけた。そしてカテゴリー各々の意味する内容を吟味のうえ統合し分類を行い、名称をつけ構造化を行った。なお分析の信頼性と妥当性を確保するため、全ての過程においてがん看護学の研究者からスーパーバイズを受けた。

５．倫理的配慮

高知県立大学倫理委員会の承認（看研倫17-12）及び調査施設の倫理審査の承認を得て実施した。施設では主治医および外来看護師長に研究目的、方法、意義、守秘義務等を口頭と文書で説明し承諾を得た。研究対象者には同様の内容を説明し同意を得た。

Ⅴ．結　　果

１．対象者の概要

対象者は５名（男性２名、女性３名）で、平均年齢は74.8歳（70～81歳）、診断名は大腸がん（肺転移）、膵臓がん、直腸がん、胃がん（肝転移）、大腸がん（肺・肝臓・リンパ節転移）、罹病期間は約１年３カ月～３年、外来通院期間は約３カ月～２年、全員が外来通院による化学療法を受けていた。

２．外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがい

外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがいは、38のサブカテゴリー、15のカテゴリー、５つの分類で示された。（表１）そして５分類の内容を吟味した結果、関係性は図１として示された。以下、文中の『　』は分類を、【　】はカテゴリーを、〈　〉はサブカテゴリーを、「　」はコードを示す。

表１　外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがい

サブカテゴリー	カテゴリー	分　類
がんを治す方法を調べたり考えたりして医師に相談する	このまま何もせずに死ぬより治療をして生きていたい	これからも治療を続けて生きていたいという強い意思
死ぬことについて考えてしまうこともあるけどやっぱり死にたくない		
少しでも長生きしたい		
治療をやめたら死を待つだけなのでがんが広がらないように一生付き合っていくしかない		
がんが少しでも良くなってほしいと思い抗がん剤をしている		
今はひどくなるというより現状維持ができているので、このまま治療が続けられたらいいなと思う	このまま治療を続け現状維持させたい	
副作用で食事をあまり摂れない時期があったが今はおいしく食べることができている		
ご飯が食べられたりがんが良くなっているからこれからも化学療法を続けていきたい		
抗がん剤のイメージが悪かったが、怖がっていたより副作用がなかった		
家族の存在があるから治療を頑張ろうと思える	家族のためにこれからも治療を続け元気でいたい	
家族のことを思うともう少し元気で生きていたい		
寝込んで何もできなくなったら生きていても価値がない	寝込んでまでは生きたくない	
寝込んで施設に行くことになるのは嫌だから自宅でいたい		
家族の存在は心強く、ありがたい	支えてくれる心強い家族の存在がある	大切な家族の存在
別居している息子が自分のために病院まで付き添ってくれる		
妻が自分の状態に合わせて料理を作ってくれることがありがたい		
孫のためにできることをし、それを喜んでもらえることが嬉しい	孫の存在	
孫が可愛い		
孫の成長が見られて嬉しい		
家族がみんな元気で普通にいて欲しい	家族の健康を願う	
個人の楽しみがある	治療前と変わらずに楽しみがある	治療意欲を高める生きる目標
近所の人や友達と会話をすることが楽しい		
家族や仲間との楽しみがある		
新しい出会いがある		
家ではできない会話をデイサービスでできることが嬉しい		
元気なうちに自分の好きなことややりたいことをしたい	体が動くうちに好きなことややりたいことをしたい	
動けなくなるまでは仕事をしたいので治療を続けて体調を整えていこうと思っている		
やりたいことがあるということが治療を続ける糧になっている		
息子が正月に帰ってきてくれることが楽しみ	家族との予定がある	
妻と旅行に行く予定がある		
気が合い冗談や言いたいことを言い合える飲み仲間がいる	言いたいことを言い合える存在がある	自分のことを理解してくれる人々との関わり
近所の人と最期の迎え方の話ができる		
自分ががんになったショックな思いを家族や近所の人に聞いてもらっている		
病気を抱えている仲間とお互いの気持ちを理解し励まし合える	病気を持つ仲間とお互いの気持ちを理解し励まし合える	
手術後医師が駆け寄り手を握って声を掛けてくれたことが心強かった	信頼できる主治医がいる	
人に喜ばれる仕事をすることとお客さんの信用を得ることを信念としてきた	自分なりの信念を持ち仕事をしてきたことで人から必要とされる	前向きな気持ちを支える過去の経験
この人に頼んだら間違いないと思ってもらえるような仕事をしてきたので、社長さんやお客さんが自分を当てにしてくれている		
思い出を振り返ることを大切にしている	思い出を振り返る	

１）『これからも治療を続けて生きていたいという強い意思』

この生きがいは、【このまま何もせずに死ぬより治療をして生きていたい】【このまま治療を続け現状維持させたい】【家族のためにこれからも治療を続け元気でいたい】【寝込んでまでは生きたくない】の４つのカテゴリーで構成されていた。

高齢がん患者は、「最初にがんだと知った時はしょうがないなあと思ったが、それならもう治す方法を考えないといけないと思った」など〈がんを治す方法を調べたり考えたりして医師に相談〉し、〈少しでも長生きがしたい〉と【このまま何もせずに死ぬより治療をして生きていたい】という思いを抱いていた。そして、「このまま副作用がなく治療が続けられたらいいなと思う」「化学療法が続くのは嫌だけど食べられると言うことは薬が効いていると思って化学療法を続けないとね」と【このまま治療を続け現状維持させたい】と今の生活を維持させることを願っていた。そしてその背景には、「家族がいるから治療を頑張ろうって思えます」〈家族の存在があるから治療を頑張ろうと思える〉と【家族のためにこれからも治療を続け元気でいたい】思いが示された。

以上より『これからも治療を続けて生きていたいという強い意思』という生きがいは、がんになったことや死ぬことへの恐怖を感じながらも、死にたくない、生きていたいという思いを抱き、治療効果を感じながら現状を維持できるよう治療に取り組み、家族の支えを糧に生きたいという強い思いを示している。

２）『大切な家族の存在』

これは、【支えてくれる心強い家族の存在がある】【孫の存在】【家族の健康を願う】の３つのカテゴリーで構成されていた。

「姉も何人かいたけど毎日電話する姉が一番大事な存在」〈家族の存在は心強く、ありがたい〉、そして〈別居している息子が自分のために病院まで付き添ってくれる〉と【支えてくれる心強い家族の存在がある】ことに感謝の気持ちを持っていた。家族の中でも「孫が自分の作ったものを食べてくれると嬉しい」〈孫のためにできることをし、それを喜んでもらえることが嬉しい〉〈孫の成長が見られて嬉しい〉と【孫の存在】に支えを見いだし、「自分の子どもと孫たちみんなが幸せに元気でいればいいなと思う」と、【家族の健康を願う】という生きがいであった。

以上より、『大切な家族の存在』という生きがいは、家族が通院の付き添いや体調に合わせた食事の工夫などで日々の生活や治療を支えてくれていることを心強く感じたり、何よりも孫の存在が治療継続に向けた支えとなっていることが示された。

３）『治療意欲を高める生きる目標』

これは、【治療前と変わらずに楽しみがある】【体が動くうちに好きなことややりたいことをしたい】【家族との予定がある】という３つのカテゴリーで構成されていた。

対象者は、「お酒を飲むことと旅行に生きている」などの〈個人の楽しみがある〉ことや、「近所の人と話している時は一人でいるより楽しいです」といった〈近所の人や仲間との楽しみがある〉こと、そして「旅行に行って知らない人とも知り合う」〈新しい出会い〉があることに支えられ、【治療前と変わらずに楽しみがある】ことで揺れる気持ちを前向きにしていた。また、「年は行き過ぎたけどもう一回だけは元気になって自分のやりたいことをやりたいと思う」〈元気なうちに自分の好きなことややりたいことをしたい〉、〈動けなくなるまでは仕事をしたいので治療を続けて体調を整えていこうと思っている〉と【体が動くうちに好きなことややりたいことをしたい】という意思を示した。加えて、〈息子が正月に帰ってきてくれることが楽しみ〉〈妻と旅行に行く予定がある〉【家族との予定がある】と少し先にある明るい将来の楽しみを生きがいとしていた。

以上より、『治療意欲を高める目標』とは、治療に影響されることなく、趣味や日課などの個人の楽しみや他者と楽しみを共有しながら、元気なうちにやりたい事や仕事を続けたいという気持ちが治療を続ける糧となっていることを示している。

4）『自分のことを理解してくれる人々との関わり』

【言いたいことを言い合える存在がある】【病気を持つ仲間とお互いの気持ちを理解し励まし合える】【信頼できる主治医がいる】の３つのカテゴリーで構成されていた。

これは、「和気あいあいと飲み仲間同士で言いたいことも言い合える」人や〈近所の人と最期の迎え方の話ができる〉、【言いたいことを言い合える存在がある】ことや、「病気の話をしてお互い頑張ろうと思える」といった【病気を持つ仲間とお互いの気持ちを理解し励まし合える】こと、そして、〈手術後医師が駆け寄り手を握って声をかけてくれたことが心強かった〉という主治医の存在などの自分を理解し、支えようとしてくれる人々との関わりを示していた。

『自分のことを理解してくれる人々との関わり』とは、最期の迎え方、自分の思いなどを気兼ねなく話すことができる仲間や家族、近所の人々などの存在や関わりが支えとなっている生きがいであることが示された。

5）『前向きな気持ちを支える過去の経験』

【自分なりの信念を持ち仕事をしてきたことで人から必要とされる】【思い出を振り返る】の２つのカテゴリーで構成されていた。

高齢がん患者は、〈人に喜ばれる仕事をすることとお客さんの信用を得ることを信念としてきた〉と過去の仕事において大切にしてきたことを語り、「今までの思い出が大切です」と【思い出を振り返る】ことで今を支えていた。

以上より『前向きな気持ちを支える過去の経験』とは、人に喜ばれる仕事をすることやこの人に頼んだら間違いないと思われる仕事してきた信念や、生きてきた人生における思い出を振り返るという生きがいであった。

Ⅵ. 考　　察

１．外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがい

1）これからも治療を続けて生きていたいという強い意思

４名の対象者から、「がんが良くなっていることが化学療法を受け続ける一番の動機」「いつどうなるか考えるけど、そうかと言って死ぬのは嫌だ」といった語りがあった。がんという病気を受け止め治療に取り組む背景には、まだ死にたくない、死ぬのが怖いという気持ちがあると考えられる。フィンクの危機理論（2008）によると、死にたくないという気持ちは防衛的退行であるといえる。がん患者はこのような防衛的退行の末、がんをなんとか受け入れ治療に励むことができていると考える。さらに高齢者は長くはない残りの人生を自覚し、がんの根治を強くは望まず、今の生活が続けられる程度で現状維持し生きていたいという意思があると考えられた。また「雑誌やテレビでがんの最新治療を見ている」という語りからは、積極的に治療方法を探す姿勢がみられた。これらの行動には、生きることを諦めるのではなく、少しでも効果的な治療を受けたいという強い思いがあると考える。以上より、【これからも治療を続けて生きていたいという強い意思】は高齢がん患者が主体的に治療を継続するために必要不可欠なものであると考えられた。

2）大切な家族の存在

対象者全員は、家族から家事や病院への送迎・付き添いなどのサポートを受けており、何かしら家族との継続する関わりがあった。これらの関わりは、患者が体験している化学療法の副作用による倦怠感、食欲不振等のつらさを軽減させ、適切な時期に治療を確実に受けられるように体調面を整える上で重要なものであった。また、Ａ県は東西に幅広い地形で交通の便が十分に整っておらず、日常生活上での自動車による移動が必要な場合が多い。そのため高齢がん患者にとっては病院までの移動手段が限られることとなり、外来治療を受けるには家族のサポートの存在は大きいと考えられる。また高齢者には加齢に伴う身体的変化の影響もあるため、医療者からの情報を正確に把握するためにも家族の付き添いが必要な場合も少なくない。このような密接な家族の関わりがあることで、治療を受けながら生活を続けることができていると考える。しかしながら必ずしも家族との物理的な距離の近さは、その存在や関係性の強さに比例しているとは限らない。物理的に距離があっても存在自体や家族への思いが心の支えとなり、治療継続につながると考える。特に孫は、高齢者の主観的幸福感を高めてくれる重要な存在で

あった。エリクソン（1990）は、多くの高齢者はどのくらいあるかわからない自分の未来への不安に対し、孫は「無限に未来に伸びる自分自身の延長」と考え、死への不安を和らげ、気持ちの安定を取り戻す要因であると述べている。このことからも孫は高齢者にとって精神的安寧をもたらす重要な存在であると考える。

３）治療意欲を高める生きる目標

本研究の対象者全員が楽しみや願望を持っていた。まず、「飲みに行ったりカラオケ行ったりすることが楽しみ」という語りから、身近な楽しみが気分転換にもなり今を生き抜く心の支えとなっていると考える。また、高齢がん患者の楽しみの中で特徴的であったのは「ジョイリハで友達が増えた」「旅行に行って知らない人とも知り合うことができる」という語りである。高齢がん患者にとっては新しい出会いが新鮮に感じられ、それが日々の楽しみに繋がると考えた。次に、「元気な間で、動けるうちに好きなことをしたい」という語りから、いずれ病状が悪化することを認識し、自らやりたいことができるように望んでいることが示された。これは対象者ががんを受容し前を向いている様子を表していると捉えられ、高齢がん患者にとって生きる強みとなると考えた。先の予定をかなえるために元気でいたいと思うことで治療に取り組め、予定が終わってからも次の目標となる予定を繰り返し立て治療に向かう気持ちを維持していると考える。

４）自分のことを理解してくれる人々との関わり

対象者全員が家族からの様々なサポートを得ていたが、高齢がん患者にはそれ以外にも何らかの社会的なつながりを持つことが重要であると考える。「手術から１週間後、医師が駆け寄り手を握って“おお良かったね”と言ってくれた」との語りから、対象者は信頼している医師が自分を気にかけてくれていることに嬉しさを感じていた。医師をはじめ医療者は、患者の身体の状態やこれまでの経過を理解しており、心強く安心できる存在である。ゆえにこのような医療者が身近にいることに気づくことで、がん患者は安心して治療に取り組むことができると考える。また患者は、「病気の話をしてお互い頑張ろうねと言っています」と、病気を持つ仲間とお互いを励まし合っていた。同じ体験をしている仲間だからこそ家族には言えない思いを話すことができ、相手の体験から勇気付けられ再び前を向くことができると考える。「気の合う、馬の合う、しがらみのない人で飲んでいる」という語りからは、気のおける友人との関わりが続いていることが示された。友人と楽しい時間を共有することで辛い気持ちを和らげ、このような空間に自分の居場所を感じられることは治療への活力になると考えた。吉田ら（2007）によれば、がん患者は人の輪の中に居て心地よく、安堵感を得る、人々とのつながりは過酷な状況にありながらも生きていく力や励みを得ることを可能にするものであると述べている。そのため、がんの治療という過酷な状況を周囲の仲間との相互作用によって乗り越えていく力を得ることができると考えた。

５）前向きな気持ちを支える過去の経験

長年一緒に仕事をしている社長さんやお客さんが自分を当てにしてくれているなどの語りから、高齢がん患者は仕事に誇りを持っていることが示された。仕事仲間から必要とされることで仕事の中での役割を感じることができたと考えた。同時に、仕事をしていることは家庭内での経済面を担う役割を果たしていることである。これらの役割により、対象者が自らの存在価値を感じることができるため、治療を継続し今後も役割を遂行しようとしていると考えた。また、「思い出を振り返ると自然と笑顔になれる」という語りから、これまで歩んできた人生を振り返ることで気持ちが楽になったり、治療に対して前向きな気持ちになることができると考えた。加齢による老化や死への不安、がん化学療法による不調などの脅威にさらされている状況でも、それらを糧にして人生を肯定的に受け入れ治療を継続することができると考えた。

２．外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがいの関係性

まず、『これからも治療を続けて生きていたいという強い意思』は、高齢がん患者が主体的に治療を継続するために必要不可欠であり、生きがいを構成する中心になる。次に、『大切な家族の存在』は、支えてくれる家族に感謝し、家族

のためにも治療を続けて生きていたいという思いであり、中心部の強い意思ににつながっている。次に、『自分のことを理解してくれる人々との関わり』は、がんと共に生きる中での孤独や疎外感を感じることなく治療に対して前向きな気持ちになれるものであり、高齢がん患者の『これからも治療を続けて生きていたいという強い意思』を支える。『前向きな気持ちを支える過去の経験』は、対象者が存在価値を感じられ、気持ちが楽になったり、治療に対して前向きな気持ちになることができるものである。そのため、生きていたいという意思が揺らぎそうになったとき、これらの経験を振り返り生きていたいという思いを再確認できると考えた。『治療意欲を高める生きる目標』は今の困難を生き抜く心の支えであり、治療に取り組むためのエネルギーになっている。ゆえに、この生きがいがあることで『これからも治療を続けて生きていたいという強い意思』を保ち続けられる。またこの意思があるから、『治療意欲を高める生きる目標』を立てそれを達成しようとし、目標をひとつひとつ乗り越えていくことで生き続けられると考える。次に、『前向きな気持ちを支える過去の経験』に家族との思い出が、『治療意欲を高める生きる目標』に家族とのこれからの予定が含まれ、それぞれに『大切な家族の存在』が関わっていると考えた。最後に、『前向きな気持ちを支える過去の経験』『治療意欲を高める生きる目標』には友との思い出や楽しみが含まれていることから、それぞれに『自分のことを理解してくれる人々との関わり』があるといえる。

以上より外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがいは、治療に対するそれぞれの思いや期待を胸に、『これからも治療を続けて生きていたいという強い意思』を中心として『治療意欲を高める生きる目標』を掲げ『前向きな気持ちを支える過去の経験』を大切にしながら、孫や子どもたち、妻等の『大切な家族の存在』と『自分のことを理解してくれる人々との関わり』を糧に、これらが相互に影響していると考えられる。

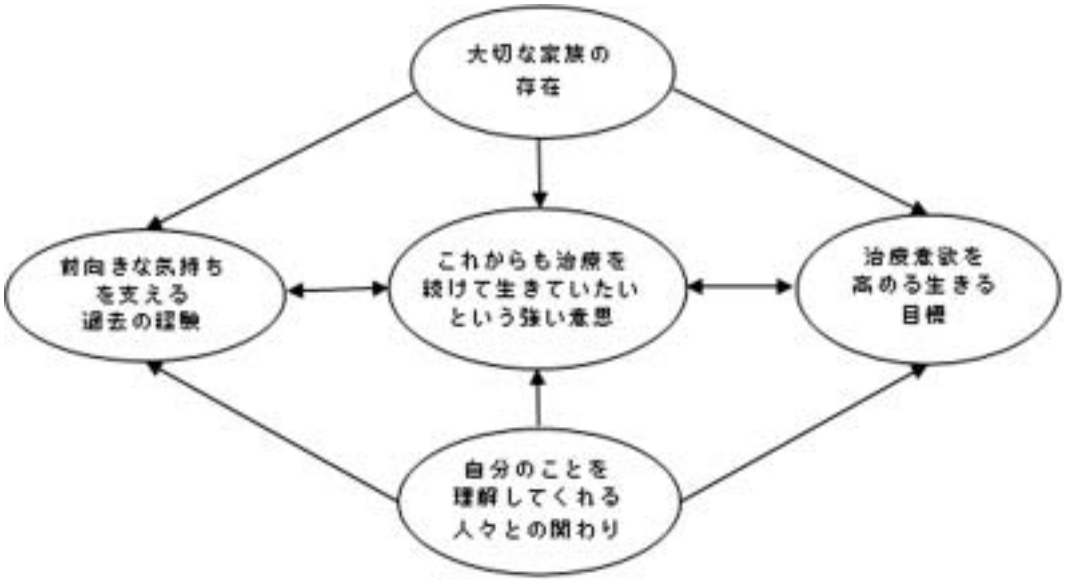

図１　外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがいの関係性

３．看護への示唆

本研究において、今までの人生において大切にしてきた思いや考え、身近にあるものが外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがいであることが示された。その中でも、生きていたいという強い意思は高齢がん患者が主体的に治療を継続するために必要不可欠なものであった。そのためそれを持ち続けられるよう、治療に取り組む高齢がん患者をねぎらい、高齢がん患者自身が日々の体調を整えることを支援するのは看護師としての重要な役割である。またすべての対象者が思い出、家族、友人など、何かしらの身近にある生きがいと成り得るものを複数有していた。そのため、高齢がん患者がそれらを生きがいとして認識することができるように働きかけることも必要であるといえる。

Ⅶ．研究の限界と今後の課題

調査施設が１施設で対象が限られており、地域特性など施設の特徴が反映されている可能性が高く、外来化学療法を継続する高齢がん患者の生きがいの特性全体を表しているとは言い難い。また研究対象者の背景として、家族との同居の有無などの条件を特定していなかったため、データに偏りが生じている可能性がある。今後の課題として、研究結果の信頼性と妥当性を高めるためには、まずは対象者数を増やしていくこと、１施設に限らず多様な地域の施設において選定条件を統一してデータ収集を行っていくことが必要であると考える。

謝　辞

本研究に快くご協力いただきました対象者の皆様、関係施設の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、高知県立大学看護研究論文に加筆・修正を加えたものである。

利益相反：本稿について、開示すべき利益相反は存在しない。

＜参考文献＞

国民衛生の動向・厚生の指標・増刊（2016/2017），第63巻第９号，通巻第991号，pp.62-70.

庄司麻美，池田久乃，青木美和他（2015）．外来化学療法を受けるがん患者の治療・療養生活の認識と実態，高知女子大学看護学会誌，Vol.41，No.１，pp.86-96.

千田操，角田真由美，柿川房子（2013）．一般病棟における終末期がん患者の生きがい，日本看護研究学会誌，Vol.36，No.１，pp.113-121.

神谷美恵子（1966）．生きがいについて，pp.60-82，みすず書房.

高橋勇悦，和田修一（2001）．生きがいの社会学－高齢社会における幸福とは何か－，p.54-87，弘文堂.

鎌田ケイ子，川原令子（2012）．老年看護学概論　老年保険，pp.9-10，メヂカルフレンド社.

小島操子（2008）．看護における危機理論・危機介入 フィンク/コーン/アグィレラ/ムース/家族の危機モデルから学ぶ，pp.50-64.

エリクソン E.H，エリクソン J.M，キブニック H.Q（1990）．老年期－生き生きしたかかわりあい（訳：朝長正徳，朝長梨枝子），みすず書房.

吉田裕子，佐藤禮子（2007）．終末期がん患者と周囲の人々とのつながりに関する研究，香川大学看護学雑誌，第11巻第１号，pp.9-16.